

## 地域と関わる園の試み（２）

### －アーティストと対話する保育実践に着目して－

○栗原啓祥（認定こども園清心幼稚園） 中島佑太（認定こども園清心幼稚園）

#### I. はじめに

著者は2014年の本学会で、保育が地域と関わりながらつながっていったプロセスを考察したところ、そこでは幼児にとって「必要感のある対話」が起きており、こうした対話の質が「学びの質」に影響すると示唆された。本研究ではその視点をふまえつつ、ワークショップを制作手法に現代美術分野で活動するアーティスト、中島佑太（以下、アーティスト）とかかわった保育実践について検討していきたい。

#### II. 研究方法

1. 対象園：幼保連携型認定こども園清心幼稚園
2. 日時：2012年1月から2013年3月までを抽出する
3. 方法：保育実践を写真・ビデオ撮影し、映像記録を文字記録化したものと、保育記録とを分析・考察する

#### III. 実践事例

##### 1. 事例の背景

著者が勤務する研究対象園（以下、清心）では、歴史的に詩人や画家など地域の芸術家と親交があり、戦前、画家を目指した青年の渡航費等の工面のため、知人に絵画を売って助けるなど様々な人々の出入りがあった<sup>1</sup>。

一方、2013年10月にかつての商業施設を改修した公的な美術館、アーツ前橋が清心の徒歩圏に竣工し、美術館周辺で多種の芸術家が活動する機会が増えた。幼児たちと作品を見に行ったりワークショップに参加したりすることも身近になり、清心に立ち寄る芸術家も多くなった。こうした背景の中、特定の芸術家が2012年1月から不定期に出入りし、幼児たちと現在も継続して遊んでいる。

##### 2. アーティストが出入りするようになったきっかけ

2012年1月、5歳児が木工等を使用し造作したところ、「展覧会、したい」と言いだし、実際に展示の仕方を見るために地域の群馬県立近代美術館を訪れた。すると、突然展示作品を模写しはじめ、「ぜんぶ描いてじゃないと今日帰れない」と、予定時間を超えて鑑賞するに至った。私たち保育者の想定と想像を超えて表現する幼児の姿に、もしここに専門家がいたら幼児の体験はさらに豊かになったのではないかと思い、地域に在住するアーティストと出会い、幼児たちと遊んでもらえないか依頼した。

##### 3. 主な事例

事例	年月	アーティストがかかわった活動の一部	場所
①	2012. 4	アーティストが「ねえねえおしっこ」と幼児に言われて戸惑う	園内
②	2012. 6	[天井にしまう] 遊んだ素材を「天井にやらせよう」と嫌々そうに発した幼児の一言を「よしやってみよう！」とアーティストが拾う。天井のフックとひもを駆使し一縷こしめていった。翌日幼児が「これ、おれが作ったんだ」と周囲に自慢する	園内
③	2012. 6	[さらだこうじょうみどりやさん] 「ワークショップってなに？」という保育者の声から、	園内

		親子対象のワークショップを保育者とアーティストとが協同で企画し実施。保護者から「ここまでのことは家でできない。これからは幼稚園でお願いします」と	
④	2012. 6	[金づちで描く] 木工で遊ぶ幼児、絵の具で遊ぶ幼児の間で幼児が、偶然絵の具がついた金づちで、叩きながら描き始める	園内
⑤	2012. 10	保育者とアーティストとでハラミュージアムアークへ行き、幼児が鑑賞したり遊んだりできるかどうか下見したところ、学芸員の方と相談ができ、幼児たちが現地で遊ぶためのワークショップ企画を提案することになる	美術館
⑥	2012. 10	[雪が降る] アーティストが素材の一つとして発泡スチロールを持ち込んだところ、それを幼児がバラバラにして階段の吹き抜けから「雪だー！」と叩いて降らせた。あたり一面発泡スチロールの粒でいっぱいになり、保育者がアーティストに対して「これもアートなんですか!」と訴えた	園内
⑦	2012. 10	ハラミュージアムアークへ公共交通機関と徒歩を利用して出かける。現地で対話型鑑賞とワークショップを実施。歩きながら走りながら10mキャンパスに描く	美術館
⑧	2012. 11	幼児が絵の具と丁寧にこめられる空間をつくろうと、保育者が保育室に「色の実験室」を作る。その際、アーティストにも助言をもらい協同で保育の環境構成をする	園内
⑨	2012. 11	[足と想像力は、私たちをどこかに連れて行ってくれる] ハラミュージアムアークで体験したワークショップの続きを清心の向かい側にある前橋公園で実施する	公園

事例③⑦⑨はある程度計画的に準備し活動に臨み、事例②④⑥は偶発的なことから展開した活動である。中でも「天井にしまう」の事例②は片付けの中で発せられた幼児の声をアーティストが拾い、一見不可能そうなことも幼児とやりとりをしながら実現していった活動である。事例③では保育者もワークショップを協同で企画実施し、親子を交えてともに楽しんだことで、ワークショップやアーティストへの理解が進んだ一方、事例⑥のようにアーティストに対して疑問の訴えが起きたこともあった。

#### IV. 分析・考察

幼児の活動は、アーティストが出入りするようになったことで、多様な関わり方を拡張したといえる。先の事例②は常識や日常にとらわれない芸術家ならではの関わり方で、このような従来の保育者の想定を超えていく対話的活動は「必要感のある対話」というよりも、やり取りの中で生まれる発想のおもしろさや、行為自体もおもしろがって真剣に関わっていく対話である。ところが、事例①⑥にあるように、時に疑問や違和感も生じる。多様な他者と継続的に対話活動することは容易でない。しかしながら、お互いが互いの活動や想定を超える過程を疑い合い、探り合い、揺さぶり揺さぶられながら、新たな保育環境が再構成されていくとき、両者は主体的な存在であり、その異質さや程よい距離感が、対話を深め、活動が継続していく際に重要であると考察される。

#### V. 今後の課題

今後も本事例以降継続している活動、地域や多様な環境とかかわる保育実践について研究を進めていきたい。

<sup>1</sup> 浅田晃彦（1990）ここに幸ありー清心幼稚園育ての親 黒田サチの生涯 一、学校法人清心学園